

グループ紹介

一枚の写真の力

〈女性フォト・ヌママツク〉

六十一年度からの三年間、年度ごとに社会教育課の「主婦のための写真教室」に通った、有志の方たちからなるグループです。

写真は記録性が強いので、何かを伝え残すことができます。心を表すこともできますから「一枚の写真」の力は大きなものとなります。そこで、趣味の活動にとどまらず、写真によって社会に役立ちたいと昨年四月に発足しました。

年度ごとのグループとしても個々に活動しながら社会に奉仕し、協力してつながりを持っていくことに努めています。

鈴木実さんを講師に、二十代から六十代の会員七十一名が、固く結束して活動し、年数回の作品展でも輝かしい成績を収めています。

連絡先 沼津市下香貫八重三〇―二
電話 〇五五九(3)〇二六〇
代表者 丹羽 瑞恵



女性フォトヌママツク記念撮影会 平成元年4月28日

食事と楽しい話の時間

〈給食ボランティア・あじさいの会〉

「小さなやさしい花が集まって大きな輪になる」これが会の理想でグループ名の由来です。昭和五十七年七月に発足、会員は主婦を中心に四十数名です。六班に分かれて月に一度地域の独居老人にお弁当作りをして喜ばれています。当初は市の栄養士さんに献立を依頼していましたが、最近は各班で工夫し、お年寄りの嗜好をなるべく取り入れた季節感のある献立を考えています。そして民生委員さんの協力を得て、公民館などで昼食会を開いています。食後は、歌、詩吟、大正琴などお年寄りがお得意を披露し、楽しいひとときを過ごします。参加できないお年寄りには、自宅に届けています。

「これからも勉強を重ね、より奥の深い活動にしていきたい。また、グループの中でミニ編集部を作り会報なども出していきたい」と、ますます意欲的でした。

連絡先 焼津市大住九六四―三二
電話 〇五四六(24)一八三
代表者 高柳 さく



みんなで一つの音を出す喜び

〈コーラス・花みずき〉

大東町で女性が育てている文化活動・コーラスグループが「花みずき」です。「私たちは道の石ころだけど、きらっと光る石ころになりたい。」と、コーラスを通してより高いものに挑戦する姿勢を大切にしています。八月の掛川音楽祭と、二月の清水での音楽祭を目標にし、年一回は専門家の指導も仰ぎながらコーラスの質の向上をめざしてきました。

平成元年の大東町文化祭では、町歌や町の音頭を解説しながら歌い、町民に親しまれるきっかけになりました。また、おそろいのドレスも初めて披露し、足かけ七年の地味な活動に花を添えることになりました。

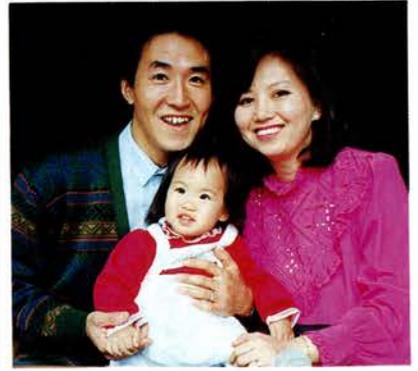
会員は三十代から六十代まで三十五名。「やる気のある人なら少々の練習不足や声が出ないことなど気にしないで、とにかく続けよう。お互いにカバーし合っている音を出すのがコーラスの喜びなのだから。」と和やかです。

連絡先 小笠郡大東町中七九六―一
電話 〇五三七(74)三九五二
代表者 杉浦 良子



静岡に住んで クリスティーナ 海野さん

英会話講師・シンガポール出身・海野展由氏
(静大教育学部附属幼稚園教諭)と1983年
結婚・静岡市に住んで6年になる。



● 出会い

私がシンガポール大学三年の時、主人が静岡大学から留学生としてシンガポール大学へやって来ました。私はクリスチャンですが、主人もシンガポールに来てから、クリスチャンになりました。彼とは、クリスチャンの集会で出会いました。明るく、オープンな人で、外国人の中に積極的に溶け込み、彼が日本人であることをあまり意識せず、ごく自然に交際が始まりました。でも、彼は、一年で日本へ帰ってしまったので、その後は文通と、年に一、二度会うこととお互いの気持ちを確かめ合い、四年後に結婚しました。離れていても、信仰が二人を見守ってくれたのだと思います。

● 静岡の女性たち

主人の両親は、私をとてもやさしく迎えてくれました。私の周りの人たちは、親切でやさしいです。特に親が子を、子が親を思うやさしさと、老人や病人に対するやさしさを感じます。

シンガポールの女性は、ほとんどの人が仕事を持ち、自立を考えています。それに比べて、静岡で出会った女性たちは、仕事よりも家庭を大切に考えています。働く

主婦も、家族のために働くという人が多く、そういう家族愛は、すばらしいと思いますが、自分自身も大切にすることを忘れないでほしいです。今、私は子供のために仕事をセーブしていますが、シンガポールにいたら、仕事を続けていたでしょう。日本の女性の良いところを見習って、自分の生き方は、自分で選んでいきたいと思っています。

● 英語教師として見た 日本の子供たち

三年間教えたミッシヨンスクールの生徒たちは、とてもよく勉強するし、よくできました。でも、エッセイを書かせたとき、発想にオリジナリティがないのに驚きました。自分の意見を持っていない、また、人と異なる意見を持つと圧力がかかるので、皆と同じ状態でいれば安心だ、という状況が心配です。もつと個々の違いを認め合うべきだと思います。

シンガポールでは、いかに個性を見せるか、自己を主張するかが学ぶ側の姿勢でした。学生は、新しいことにチャレンジしてほしいです。また、日本の子供たちは勉強しすぎではないでしょうか。学校と塾で忙しく、遊ぶ暇もないよ

うです。家族とのふれあいや遊びは、創造力と個性を伸ばし、人間形成に必要なものだと思いますので、日本の子供たちには、もっと遊んでほしいです。

● 娘・セーラに

聖衣良(セーラ)は、今、一歳半、親子のスキンシップがいちばん大切な時期なので、私は仕事よりも子育て中心の生活をしていきます。セーラには、聖書の話を読ませてあげたいし、本もたくさん読ませたいと思っています。それは、信仰と自信を持ってほしいからです。

● 日本人との結婚

私は、中国系シンガポール人です。シンガポールに住む人たちは、人種、国籍が様々で、中国人、タイ人、マレー人、インド人、シンガポール人などいます。私の弟や妹も、インド人、中国人、タイ人と結婚しているので、私が日本人と結婚しても違和感はありません。今、日本に住んでいるけれど、主人と一緒になら、どこの国で生活してもかまいません。信仰と愛と信頼があるから。



思へばこの世は

仮の宿

下重暁子

講談社

明治という時代に人一倍の自我を持ち、女も仕事の場で自分を表現することに目覚めながら、自我と闘い続けてその場で生ききることに自分を見つけた一人の女性がいた。

著者の祖母、吉田マスは小学二年の時「女に学問はじやまだ」と学校をやめさせられた。男の兄弟より優秀だったマスは口惜しさに燃える。裁縫を習うという名目で町へ出ることを許されると、染織講習所に入って裁縫、染色、織物の腕をみがいた。さらに友禅染めを習い、彼女はその腕で身を立てようと思っていた。

そこへマスの頭の良さを見込んで、隣に住む旧家の地主吉田久太郎が、どうしても息子の嫁にと毎晩懇願に来る。結婚したら自分を

生かすチャンスはないと思った彼女は家出するのだが、連れ戻されてとうとう農家の嫁となる。

舅の久太郎は、趣味人の息子義一の代わりに、すべての期待をかけてマスを仕込もうとした。田の仕事に加えて山仕事、家事に夜なべ仕事と、寝る間もない労働を持ち前の負けん気でこなしたマスも、次女の死の重みには耐えかねる。「行く先も行く先も山なれば、ここらあたりで死んでみましよう」とマスの歌が残されている。生きながら死んだ気になって、舅に教えられた労働の尊さと、東北の地に根づく新鷲の信仰を心のよりどころとして、マスは闘い続けた。

二姑一舅を見送ればマスは一家の柱。戦争や農地改革の嵐を乗り切り、長男を学者、次男を医者の方に進ませて、彼女はたった一人崩れかけた家で農業に生きた。一日の農作業を終えた後、毎晩縄ないをして得たわずかな金を福祉協会へ届けて「慈善ばあちゃん」として知られるようになった。

マス九十二歳の冬、自我をねじ伏せて生きてきた彼女が老衰の床で言った「自分くらい可愛いものはない」という言葉に、彼女の熱い思いが感じられて胸が痛む。

新刊紹介

「わが娘の『最高の人生』に
父親だけがしてやれること」

N・マローン著・竹内均訳
思春期を迎えた娘にとって、父親の無意識な態度や行動が、いかに彼女の生き方を左右するか。忙しすぎる日本の父親にこそ読んでもらいたい本。

三笠書房 一、二〇〇円

風を野に追うなかれ 小倉千加子著

幻想をおう主婦・お嬢さま現象・このごろの性と殺人などをフェミニズムから切る。ムツかしい問題が、おもしろい語り口にのせられて笑いながらわかってしまふ。

講談社 一、三〇〇円

「母親」

ルイ・ジュヌヴィ、エヴァ・マルゴリー共著
母親へのアンケート調査をもとに、母親とはこうあるものという枠を取り払い、それぞれの立場の女性たちが自分の子供について、自分が母親であることについて本当はどう感じているのかが率直に語られて、興味深い一冊である。 朝日新聞社 二、八〇〇円

「生き方の深い人 浅い人」 重兼芳子著

自身の実人生を語りながら、生きること、老い、病いと医療、死に直面する時の心のあり方、宗教とのかかわり方など、作家の目で辛辣に、かつ的確に示唆している。

海竜社 一、二五〇円

ととテと手 三田佳子著

谷川俊太郎の作品の一節からこのタイトルは、つけられた。たくさん人の手に支えられて、女優として人間として素直に、感性豊かに生きてきた三田佳子の半生記である。

主婦と生活社 一、三〇〇円



おばあちゃんの塩むすび

我が家の息子たちは、おばあちゃんのおむすびが大好きである。それも塩味の真っ白なおむすびだ。私はどうしても固く握ってしまうから、御飯粒がぎつちりとくつき合っぴとつもの固まりになってしまふ。のりでくるんでしまふから見栄えはいいけれど、息子たちの口はごまかせない。「おばあちゃんのはやっぱりおいしい。」とのたまふ。本当のことだから何も言い返せない私。おばあちゃんのおむすびは、御飯粒の形がくずれずきれいに握られていて、御飯そのもののおいしい味がある。何せ我が家の息子たちは、おむすびの中に梅干しやこんぶ等入っていると食べない。おむすびとは御飯だけを握つてあるものと信じて

いる。

おむすびの味で、おばあちゃんを身近に感じてもらうことはうれしく思う。おばあちゃんも、時々訪れる孫たちのために真心こめて炊きたての熱々の御飯を、手を真っ赤にしていくつも握つてくれる。おばあちゃんが、ラップで握つてしまふ私に対して、「今は家事も楽になつて恵まれてるんだから、何事も面倒がらずにやるもんだよ。」と言つたことがある。確かにそう思う。

昔から伝わつてゐる良きというものは大事にしていきたいと思うし、年寄りの言うことに耳を傾けることは必要だと心から思う今日このごろである。しかし、おむすびの味だけは超えられそうもない。
(N・N)

わが村のチャールズ・インガルス

農村へ越して来てしばらくは、異邦人の心境だった。

村のこと、子供のこと、食べ物のこと、男衆の意見に従い、女衆は黙々と働いてゐる……そんな印象が強かつた。

「封建的だ」遅れている「個性をつぶしている」と単純な私は怒つてばかりいたが、実際にPTA活動や廃品回収、キャンプファイアー等に参加してちよつと感じが違つてきた。

若いお父さんたちはとても気さくで、積極的に発言し、女性の意見も尊重して率先して行動していた。力仕事はもちろん、ゴミの始末から他人の子守までごく自然にこなせるのは、農家のしつけの良さだろうか。

「ドブ掃除でも力仕事でも子供を背負つて

ホプリ



私がやります。」と男らしい主婦をめざしてきた私には新鮮だった。

「男の沽券」なんてものにしがみつかなくとも充分に男らしい男たち。そうだ。彼らは「大草原の小さな家」のたくましい父親チャールズ・インガルスに似ている。彼らは生活を支えながら立派に家族の一員、地域の一員としての責任を引き受け、なおかつそれを楽しんでいるふうに見える。

彼らが家庭の中でもチャールズのように理解と指導力のある父親であるかどうかは知る由もないが、この地の男の子も女の子も彼らを見習つて強くやさしく育つてくれたらと期待している。
(K・M)

こだわりを育てる

「ねつとわあく」の取材で出会つたFさんからの手紙の中に、メッセージが入つていた。「きようスーパードきゅうりを買つた。九本も入つていた、百九拾八円だった。これをつくつたおひやくしよさんの手には百円玉が一つ残つただろうか？」きゅうりの絵を添えてあつた。Fさんは、村おこしで頑張つてゐる人である。

取材の日「七年かけて、主婦たちが店を持つたそのエネルギーは、あなたの場合どこから出てくるのでしょうか。」と個人的なことに立ち入つて尋ねると、Fさんは次のことを語つてくれた。八歳のとき終戦で、その後の個人の自由を尊重する文化の中で育つたこと、娘時代東京の中央卸売市場で働き、伝票一枚でもうける商社と買い手次第で値の決まる農家の立場の違いがくやしかつたこと、逆境でもやればできると祈りつつ新しい試みを忘れなかつたことを。

私はきゅうり九本が生産者にとつてどの程度に値するのかわからない。ただ職人だった私の父の労力と収入を思い出し、百円玉の重みに共感する。Fさんは市場で感じた思いをいつも問ひながら新しい生き方へ結びつけ、行動を始めた人なのだ。ここから実感をエネルギーにした力強さが伝わってくる。

取材で出会つた自分の生き方を持つてゐる方たちは、自分の感じたことを大切にしていて、自分の言葉で話される。自分の感じや思いにこだわり育てること、それを学んだ。

(U・H)

ねっとわあく情報

平成2年度

○催し

- ・婦人の県政体験学習 婦人課
- ・しずおか女性会議 //
- ・「現代社会と女性」セミナー //
- ・家庭を考える県民フォーラム //
- ・婦人の地域交流 //
- ・婦人活動参加促進講座 //
- ・婦人の地域活動実践講座 //
- ・婦人問題研究講座 //
- ・働く女性のために 就業婦人室
フレッシュコース（初級講座）
ステップアップコース（中級講座）
アドバンスコース（上級講座）
- ・働く女性の健康管理セミナー //
- ・働く女性の子育てフォーラム //
- ・消費者ホーム講座 消費生活課

○募集

- ・婦人の海外研修団員 婦人課
- ・「ねっとわあく」女性編集員 //
- 任期は2年度1年間で、年間15回ぐらいの編集会議と取材が主な仕事です。
- ・婦人問題通信講座受講生（5月） //
- ・県民だよりママさん特派員 広報課

○電話相談

- ・すこやか電話相談 社会教育課
- ・母子家庭等電話相談・ははこぐさ 児童課

ふるって御参加ください
お問い合わせは婦人課まで

県庁までの片道3時間が、私の暮らしにはずみをつけてくれました。これからも、『だめでもともと』の図々しきで新しいことを吸収していきます。 清野真由美

何もわからずに参加して、あっという間の1年でした。他の編集員の方たちに助けられてなんとかやってこられたのがうれしく思います。編集会議に出る前夜は、眠れなくてドキドキしていたことが、これからは楽しい思い出に変わります。新しい出会いが視野を大きく広げてくれました。 永瀬紀子

「人生の豊かさは出会いの豊かさだ」という言葉がありますが、この「ねっとわあく」の仕事をとおして出会えたすてきな人たちのおかげで、また少し、心の景色が広がったようです。 竹内繁子

様々な生き方をする人に直接会えたのは、私には何よりの情報となりました。さらに女性の状況を見通しながら、今できることを捜していくことに、励ましをもらった気がします。 内山春美

編集に携わって得たものは、女性学を学んだこと、生き生き女性と知り合えたこと、原稿書きで国語力がついたこと、行政をかいま見たことです。この体験をプラスにして、これからの人生を深く生きていこうと決意しました。 杉山真知子

女性のための情報誌

「ねっとわあく」第16号

平成2年3月

編集・発行 静岡県県民生活局 婦人課
〒420 静岡市追手町9番6号
☎ <0542> 21-2137

表紙デザイン

県浜松織維工業試験場 小杉思主世